東雅　二



東雅巻之一

天文第一

筑後守從五位下源君美撰

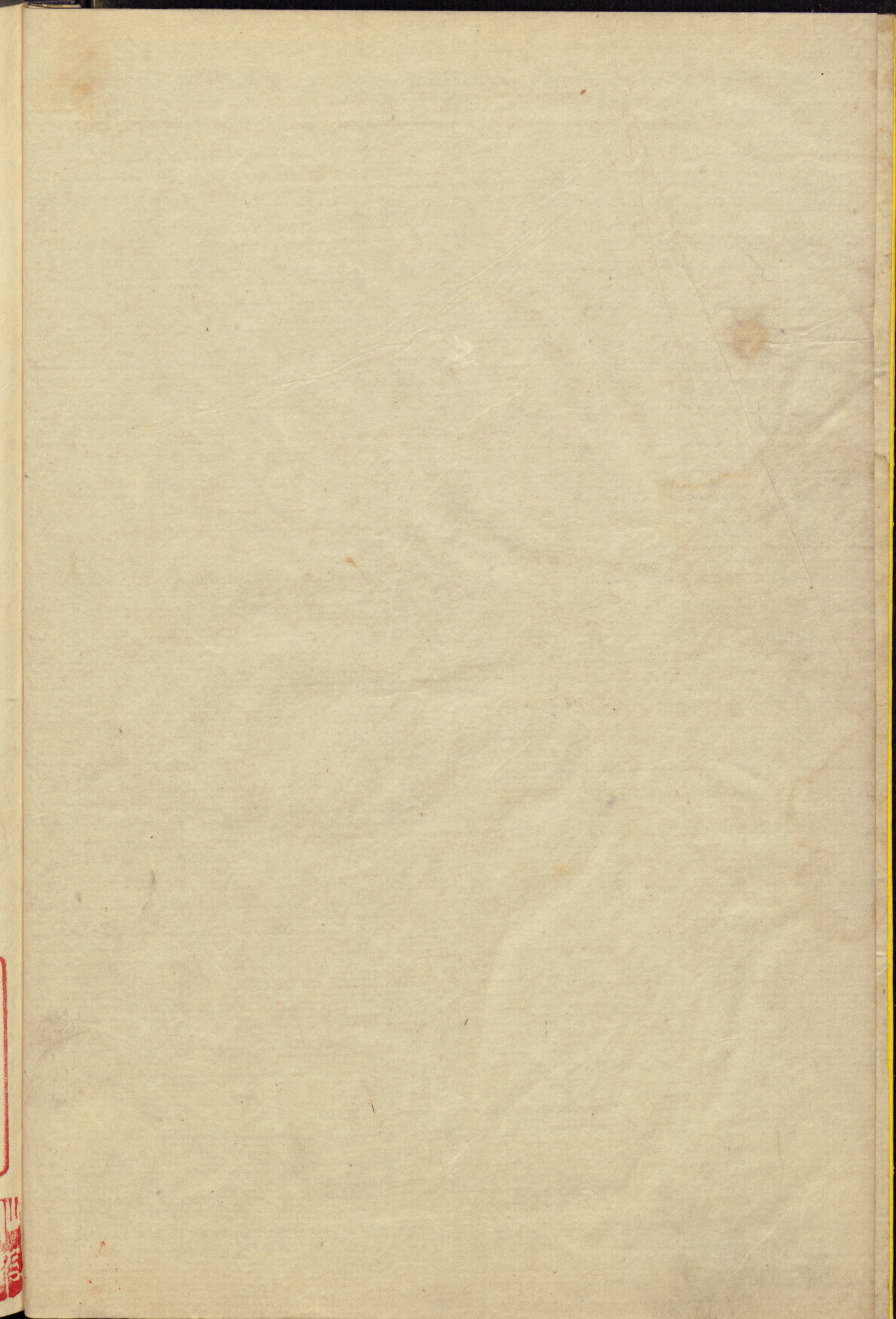
天

アメ義不詳我国上古の代にアメといひしには同しからぬ二の義ありと見ゆアメと讀してアマとも読しは天字に訓ありと見えさらに漢字採用ひて天讀にアメとも又アマともなしぬ此にいふ所は古語の義説也しきをしあらし











東雅巻之一

天文第一

筑後守従五位下源君美撰

天

アメ義不詳我国上古の代よりアメといひしも海も同しからす其義異なるありアメ亦将してアマといひしは其称云ふ所ありと見てより漢字を採用ひて天読てアメとすアマとなりては古語の義隠れしと見えしあると




みあや言葉上

天をアメといひアマと訓し義齋翁也し所

その説多かりされと文字の言なとゝ同し

うへは我国の道我国の言を主とあり他方の言は古と後とまた

こゝぞ侍り和漢梵の書に見えし所とおしく我国の道徳

教しなむよそひ一二の似たるあり善悪く皆其義相合也

さすともあらはにいひもしも我国の古言よろしく其徳然

教えし凡義不詳といふもの従皆正す微略然しアメ

といひアヤといふさとも其義並に詳ならねと史実

録にあるされし所以併見なり　天を訓してアメと記し

あり天の訓しくあるをもしくして上なるをもとして天ア訓し

てアメといひしと見えしけりそ和学のみなる所以とと

もてアメをもアマともいひしとみえしあり古き義齋

る所ありと見へけり此等の事とも古き我国の書を讀

得ざる人の自ら明かなる道を主とす説を貴ぶべし

云事あるをあしひアメをもし将してアテといふといひしハ万葉
集抄にアテとをいひアメしるとをいふなりむかしより云ふ
咀にアメツチとしといひアメにあるいはしいふなるし女夢也又久
陞れアテノカハラなりといふ常の事也てとひメといふてとメ
は同門お過の右に男夢をよべハアテといもよえしと見ゆつ
およ気見しれ将後といふもの後ふき可徴ふなし
天又ソラといひし事は古の語なれとも天気
をアメといひソラといふ所言(サヒ)といふ同しかれと
古事紀に古の初陰陽の二神大條ある秋津島を生む又名ハ
天津虚空(ソラ)ある秋津根といふと見えて又旛に紀あるし饒速日(ニキハヤ)ぞ
天磐舩(ノイワ)に乗りて太虚空(ヲホソラ)に翔行き巡睨(ホセリ)し天降りそすひある虚(ソ)
ら見ける日本(ヤマト)也(ノリ)と云則ちる述をいふ歟としるなるべし又古事紀に

彦火々出見尊乃御事を天津日高日子穂々手見尊と申し又
天津日高の御子虚空津日高と申せしと見へたりこれにて上
古の時に事よりソラといふ語の見えし始と知るに此語
は天をさしてソラとソラといふは別阿修羅（アスラ）を略しまへて上古乃
語に梵語多くありといふ説ありし天下の言にもまゝ多し
彼国の方言をあまた出せるもむかしは多かる中にし似寄るあり
そなたうなりけんやされども天をはアメといひ虚空をはソラ
といふ事のことさらのをしいふ所同じからず猶もこれ舊事
紀には天津虚空とも又大虚空を翔りきて天降るとも
ありされども上古の語にもアメといひソラといふ事はまたの
通しも徴の明らかなる舊事古事記紀に見えし所既に
かくれなし天の字を讀くソラといふも後世におし所にて
阿修羅なるの説信ずるに足らざれば

日ヒヒとは霊也上古の時凡物乃霊なるを稱し
てヒヒと云ふされど後に漢字を借用ひる
ときにヒ霊の字を讀てヒとは訓じて
舊事記にも産霊の字を讀てムスビとせら
れしを古事紀にも産巣日と書して讀
ミにムスビとせしのこゝろは是日といふハ霊の
義なるの故也

古語にムスビといひしは産の義にて
ヒといひしは霊の義なれど産霊の字

を隠りてムスビとは云るなれし之又産巣日と云説せしは産巣
日二字引合してムスビと読ミヒといふハ日の字を略ししなり
循気を通し見るに日とは
霊の義なる事を意ふべし　日の字並読てクサヒといふ
事あるは奇（記）くクシビといひクサといふも轉語
なるしは霊ハ霊の字に見るが如し其日時の
日の字読るがといふは　初二日をフツカといひ初三日をミカといふの類なり
カとは開之始めて天照より開る明かの徴して
いふや　アクといふによりて合せる時にカといふことと
ともあるなりさてを古韻の字より切の声といふ也

暦には漢に月の初二日を旁死魄といひ初吉

哉生明なといふこと日の訓にはあらず次

月つき舊説に日中次の義といふ舊事古

事日本紀等より先に生日神に生月

神と見えて又光彩亜日可以配日なとと

見えたれと舊説のことき義に合へる所も

也上古の説にいへるごとくハ次の義にて日に配の

義あり（書の字の下併見へし）又弦月をユミハリツキといふも
其形の弓を張るに似たるの謂也望月をも
モチツキといふハミチの轉語にて満月といふ
舊説にモチツキといふは日月相望の義とこそは
の如し　或いふ同しチハ語助なりしといふ此説望の字に
おほくハ其義を得しとも見ゆモチツキなといふ説の中世
より後に出たる義にしてさもありぬへし上世よりいひ絶
し語なれはなほ旧説のことくはいふてあるへきこと也上世乃
語にまして漢字の借得たりしこの在や
星ホシ陰陽二神日ノ神月ノ神生ありし後に

ふ事も見えされと星乃神生すへしといふ

事は皆元は天に悪神(アシキ)あり名を天津甕(ミカ)

星といひ又名は天香々(カヽ)背男(セヲ)といふを

齋主の神を遣しかと其織も服はぬ古語に

火の燃ゝくほしといふほしとは色光れ火のごとく

かゝやくといひしに似たり

ほは火(ホ)也しは詞助也又火をほ
しといひしも日と云事の略せしなるべし

天河アマノカハ義自ら明也天(アメ)と河(カハ)といふよりて

あまり詳にしるさむも

右古風俗にも多く存する此等の類猶多かり

雲クモ古語にクモといひし黒しといふ詞なるへし

クロといひクリといふは黒暗也暮也クルと

いひクレといひ暗也クラといふことゝも皆是也

万葉集秋の一日の暮るゝをクルともクレとも

いふも是くなき個しといふ此義なり雲蔽ふことを

天暗くなりしをクモといふクロといひて

クラといふもクモといふ即輕浮之天陰成クモ
ルといふは雲(クモ)生るの謂にて空にありて
いだし雨をも降し

霞

カスミ未詳倭名鈔には唐韻を引て日邊
赤雲なりと注しぬ説文に雲日ノ氣相蕩と
を見えて則晨霞暮霞なりといひしものあり
て此みしても朝霞なとも いひ茜刺(アカネサス)日とも

豊(トヨ)旗(ハタ)雲(クモ)に入日(イリヒ)刺(サス)なとよいひしとぞ是也

今俗にアサヤケユフヤケなとといふも是カスミ

といひし是赤彩也万葉集にカといひ

しは赤き義也といひ赤きをアカといふアは発語の詞也カはヤクといふことにしきこれ火の焼るこゝろなるへしヤクといひヤケといふ語合せ

はらあはカといふこゝろなるへし俗に霞をヤケといふも

まこと也萬葉日本紀に彩霞なとゝいふは帰潔

やことといひスミといひソミといふ皆轉語也

萬葉集の哥ニ深
須くこゝといひたり

烟

ケフリケとは氣也フリとは降也氣降之謂也

霧

きりといふ亦暗く隠し霧說ニきりとは
クロの略なりしと云也
キはクゝ日顔にしてりはクロ
當此日款あるをいふや

日向國風土記ニ昔天孫尊此國高千穂二上之
峯ニ天降りし時ニ天暗冥にして晝夜
物別なくして土蜘蛛二人が教のまゝに稲を

穂をぬきて籾としてなけ散しぬひしの
冬天開晴の砌よりことにまして高千
穂二上の峯といふを眺むれは七峯と
則今霧嶋が嶽といふものなり延喜式にも
見へし霧嶋社則今もその跡の西にある
しからは旧説のとゝまるも其義相合へりと
見えたり　給僕とてぎれといふもあると
これ則啓の義なり

虹ニジ万葉集歌にはノズとよみ有り今も東國の俗にもノジと云ふや倭名抄にはニジと讀む皆音の轉にて其義は詳ならず 万葉集に虹讀て ニジといふニジといふ名即縁にて とは細物にししたり似たり また倭名抄作り暈讀て日月のカサといふ詳ならず

風カゼ義未詳古語にサといひ又カザといひし皆是音の轉又略せしにて異なる義無

と毋間天は舊事紀に陽神朝霧を吹撥

し氣化して風神と成れりといふ事ハ

みゑて宰也しとう髪といふ義なしと思ハ涉れ

古語にカセをサとのいひしよりカといひしハ上の詞

助としたりし似たりと云系掛りカハ詞の上の助なり

弱きをカヨハキといひ細きをカボソキといふがごとし小さき

見えたりまたセとは狭やともみえたり迫をセマしといふも

即迫狭の義なるやさればカセといふもセは氣乃如し迫

ゆるをいふ事さらくハ雷風お落（せてれ）なるといひし事なれさらくせ

それもさそれかし

いひしハセの略語也 疾風をハヤテといふも疾速の

義なるべしは唐書史記に連飄旋風等の字を用ひたりハヤテとは疾風也
今俗にハヤテといふ
ハヤチの轉せし也

回飄をツムジといふ回旋する義也旋は毛のことを
紀をもツムジといふ即此也
俗にツジカセといふは辻
風の字を用ゐるはツジカ
セといふツノ字を略ける事を常ひて誤ひしくたゞ八束ととム
ガシといふを今はコガシといふ事なるべし

我国の俗旋轉の貌をツムジといふ紡織
具にツムといふ物あるも其旋轉の義なり

まとるく 倭名抄飃の字注してつむじといふ つむとはひつむしといふ又是旋の類也 また暴風
をアラシといふ是即暴の義也我邦の俗嵐の
字を讀てアラシといふ此字もと山氣也
然るにひろく迅捷の風をいふ事となれ
梵語より出つ和名鈔には孫愐が嵐を山
下ヨリ出ル風也といふ説を引てアラシと注せり
又暴風の字をあらし漢語抄に訓ハヤテ

又ノワキノカゼと註せりノワキといふは二ハカの
猛しく即暴き義也俗耶なれ字義
聞えしは暴風乃出よりあるをもヤマオロシ
といふ野なるをはノワキといふ可似合

雨

アメ義不詳アメとぬといふは歟落れ溜り
然り旧事紀には雨の讀をアメフルと訓也
アメとは天水（アメミ）をそのメといひし意にメミの二ツの意を結を
しるしと見え垂り水をミといふ義は下にミ在

又日本紀に雨氷の字を讀てヒサメフルといふ
ひさめとは氷(ヒ)也サメとハアメといふ語の轉なり
即雹也又これをアラレといふやアラレとは
散(アラレ)て逆散(ホトバシリチル)の義なるべし日本紀に散の字
讀てアラレといふの心もこれ今俗これ
をヒヨウといふは氷雨の字の音(コヘ)によりて
よびしなり推古紀に大雨河水漂蕩滿于

宮に庭といふ大雨乃字照写して大雨と
為るしをヒサメと讀ミ又其誤を傳へて
皇極紀に大雨の字をヒヒサメとは讀
む也源順の博物為るも私記に説を引
て倭名鈔に大雨の字を收めて讀ゝ申
ヒサメと云し、詞なるらむ因ては暴雨
をもムラサメといふハ、家毎の俗見ゑ乃均し

又日本紀にムラといふ暴雨の常よりふらず
均しからぬはかくいふ也小雨をシクレといふは
陰雨也日本紀に天陰の字を讀てシシケと
いふことは日之シケとはシクモルの義と見え
たり今も西国の俗に天陰をシグレと云
東國の俗にシケといふこれ古き俗の今
も其紙民間に遺りてはしケといひクレといふ

のこに聞ハ又将暮しの天陰りて小雨
ふるをシグレのアメといひし我等あるは小雨
をシグレといふはアメフル也詞にをアメ
のことをいふなり雨の名をニハタツミといひ
詞にハ暴水(ニハタツミ)をニハタツミとハミハカの潦なりと
は潦にしてはなき

露 以上義不詳 万葉集抄にはつゆといふなり

水の白手紙タエといふ字見えたり白文をエと
いふ義は雪の注に見えたり
ツユとはそのツブく
としそ白細にし
もあるべしれ粒をツブといふもツといひしは葛（ツヅラ）なる義
あるしに似たり古訓あるも字彙らくツブラといふ所り

霜

シモ義不詳东水の地方よく氣の虎乃
炎もめてしれえぬる故にかもる雲乃来求
垣下なるよ巻く皆芸をむしぬるをシラズ
といふものゝ名昴是霜華之シラホとしシモ

といふ語も略したるやうなれと諸方言には
おほもととしもといへるはなきぬ白氏よりおこれ
るといふ事の徴とひとつには足ぬへし又
或説にしもとはしん也意こそ事の弟子しんをいふやれといふこと
いへるも又句読潮の縁を係見るへし

雪

ユキ義不詳舊説に上古の語にユキといひ
しは潔斎の義なるへし雪をユキといふ事
も皎潔の義なりといふ古語にイといひユといふ
ことは相携していひける

斯の字添てイラヽエともいひしのこらず即此し古語なり
ユキといひしハ即今キヨシといふ詞もユの音を聞まて喩ふ
時はキヨしといひきといふ音ハ潔しくシとなるなれ物の
色白きは潔きものなれハ古語ハ是色も白きものゝ多きは
ユといひけり雪霰霜又は綿繭なとの白きもの是也雪をユキ
といふユとは白しキとは其の潔して消え去るを白にて
消ゆるしといふ説の
たる事いふへき義
アハユキといふ事舊事紀ニ
日神素戔嗚神乃天に昇りたまひしをきゝて
たまひし時蹈堅庭陥（ムカ）股（モヽ）若沫雪蹴散し
たまふといふ事見えしを日本紀にも其文なら

も古事紀に見えし所もまして見ゆる傳な
抄に沫雪の字取らずして讀てアハユキといひ
日本紀と引て若弱如水沫と注せり これ私記の説なり
釋日本紀にも師説と引て釋せし説意にて
に同じ世人これの説によりて沫雪とは
春雪をいふやうもいひ又冬の初雪なるとも
いふ也しかといひ続けれし萬葉集の中にも

者の歌もあまたあれと證しかたしといへとて
猶よく思ふにはあは雪なるとふりしき梅
の花さへまかふれてとよめる諸あり世人の
説々の多くしら[illegible]雅にしたかひ沫雪といふと
思ひたるハ雪の初ふりていまた華やかて
はかなくきえて水沫の結ひさる中にふれ
る沫雪といひし也古事記の歌に多久夫

須麻佐夜具賀歌多久尓阿波由波能と見へし八 多久史須麻八榜食し佐夜具とは喧嘩阿波由波を八昂沫雪之形譯須賀理媛命のよみましゝ尓なるへし
も降れる音のさやけるをいふなるへし古語部
今アラレといふ物にてあるなるも今ハラヽカゝと
いへるされは誤也然るを後の人古義を誤解
して古も弱如沫なといひしよりして又云れ
雪の消やすきをいふやれといふ事に似たれ共

しらし万葉集ニ見えし歌とも後ハ文選
めるへし古を去る事も遠けれハ又説文ニ
見んへし然れとも係見んしと見えされとも其の
かゝるへき義を守りきにハあらす　説文ニ霰ハ稷(カハ)雪也言雪初作未成
華円(ナレリ)如稷粒ノ也と見えたれは雪いまた華を成さゝらむをはあられ
といはむ霙もといはれし優雪ともこそいふへけれ万葉集ニ霰
の清らも仁何ましく見えし中殻ふりもあられそれの中梅の
花さくちらかゝむしてしかるハ淡雪のいまた華ならさ
さるをとりてもて
いひしなるへし　又雪しる雑ヘ古ふると云ツレ

といふは水降に將滴なるに似たり傳忘鈔

なし霙の字讀てミゾレといふ

雷

イカツチ　イカツチとは震る神といふ

かミなりは上古の語なりイヅといひイカシと

いへりハ嚴震の義也これも舊事紀なり

は嚴の字讀てイヅといひ日本紀ニハ亦

讀てイカシといふ總ていふは神祇の字

讀てカミといひしなど分ちてハ神の字讀てカミといひ祇の字讀てクニといふ山川之神綿津見神などいひしこと多是也（山津見神等のことも紀にも皆祇の字を用ひられたれとなほ地祇の字讀てクニツカミといひし事もあり）いふ亦略してツチといふ軻遇突智（カグツチ）神野椎（ノツチ）神などいひしもまたこれ也（軻遇突智ほと迦具土とも書來雷などとも書し）（野椎ほと野槌とも書したり）ツチ亦略してツツといふ磐筒神

底筒神塩筒老翁のことなる一門にて伊磐(イハ)
土底土塩土(ツチソコツチシホツチ)なといひし也是等は又雷の字を書
てつちといふ山雷(ヤマツチ)をしては天香山の五百箇(イホツ)
真賢木(マカキ)を掘(サネコジノネコジ)しといひ火の名を厳香来雷(イヅノカリツチ)
とし薪の名を厳山雷としるされしかのおもむき
これなり これらの事蹟は紀日本紀等にて見るべし山雷は 則山は其形にし香来雷は火性なる也
いかつちは則ち厳雷といひし事霹靂の神

此のこいかつちといふハすなはち山木水火乃
あらハれを神といひてイカヅチとせしハ
みもあらハ雄略紀に天皇三諸岳（ムロノヲカ）の大蛇を
蛇もみひ名改賜て雷となづけしと
見えたれとも河まてゝも蛇あるつねもなき家
の尚かくて雷といひし事稀なる古の俗ハ
ことくもしもと云見えたるイカツチト又ハナルカミと

といひ ナルカミは鳴神にて雷霆也 声あるを称し謂へるなり 霹靂をカントキなと
いふも皆是神をかしこく称せる事なりといふ
乃義は相同し カントキとは疾雷といふこと
し
或説イカツチとは怒つ義にて雷を天の怒にしといふ
事あるはイカツチとは槌なり人物を撃の義にしといふ
義合へりともみことへされとイカルといふもイカとは厳之義にて
ルといひりといふのこころ八渡聯して是又要るへき義なり

電

イナビカリ イナツマとはイカの約縮かく也と
象形へきの事にしてヒカリは光也又イナツルに也

ヒいふワルことは出来し又イナツマともいふハ
かしこきは農家参畢の日ニ雷雨を好く
稲の胎(ハラ)ミし事をおもひ量りなせし様
しこと嫁稲妻としお号す

已上天象

歳

トシと義不詳年の字を讀む事ニ同じトシ
又略してトセとハヒといふ一年をヒト、セとハ二年

或フタトセといふのしるし是也二十年を二ソ
チといひ四十年をヨソチといふのたぐひは
トヽといふはし省略してシトいひ亦略し
てキトいひしく

月

ツキ正月ムツキ二月キサラギ三月ヤヨヒ四月
ウツキ五月サツキ六月ミナヅキ七月フツキ
八月ハツキ九月ナガツキ十月カミナツキ十一月

ミモツキ十二月ミハ天義芸よ不浄殘虫の月
名太古よりいひならはしを法と思へ候
齋事絶り邪神ニし音サハヘなす故しき
いふ事ミをいひ見てゆりそれの中二月ハ様
魂の字を用ひ遣くサハヘとし二月を又月
魂の字ハ用ひ後ひ事様魂乃としてこ
ハ上宮太子れ比乃ひ又月ハよひてサツキと

いひしを既にあらはしおやを條のことをは
といつ世やあまたに陰陽の二神日ノ神月ノ
神を生給ひしに月神ノ御名一ツは
は月讀とも申すは上古乃語に讀也
といひしは後世にカゾフルといふことゝ也
なるともいひ傳ることは月の數をかぞへいふ
愚かなるにいふなれ君形なき事をも得たる

は天地より始りて風雅の名に起るにて後
世にいふ事ハ上古よりいひし和の哥
とも見えたれど古哉さる事久しく世
のかはりうつりもて好めるに随ひていふ風也其
かはる事なりとも是好めるの友しなくハ和漢月
梅見月なといふ好みにしく後代の詩詞に出
られしと道より月名となりて其れにはなく

百歳をへて年久しくも世の人の心にしるし不忘は
物に其名をつけ置て古よりいひし所乃しるし
をしる人もなくしれぬ事多し又月をさつきや
といひ又世の人今とも知らずして其月
しなしといふ也此月の事も舊年に
見えし不知也と古の時の名にし見しをも
らるべし卯月長月陽月(カミナ)家(こハス)綴月といふの

まとなハ漢よりも來るしいひ傳ふしおなしは
此等れしとれハ我國に漢字渡りし後の人の
いひし所なるにや又書とかしくも名れ國し
うりしよやとへくくも詳なる事をしらん
疑とは闕くとも疑も疑を將ふとも是一二をおふに注し
ぬ舊なる紀にハムツキといふはムツビツキといふし上古れ
注にスベムツ睦なしといふ事はあらしとムツをムとれいひ
て睦の義ありとも見へまて又ムツしといむツキといふト
いふとしれかさなるを左りしむとりのツしといふとはふ
事例のツといふとしハこをわりなりといふ由りれと兄

もまた赤の頃へしけると思へるハきサラキヤヨヒといふのと
みな聞るく秋せし本のことくは其秋ならしおもて寒
さくくてぬる月しるも草木ぬ生そふる月くるも赤るの
下しるも見へハ古説りキサしるもキサケるもきりき
しるもキサイるヒいひし事なるもいはしとも秋せし本の
義しるし聞しうハ卯月といふしとも詩の豳風小
四之日といふ中の周正の四月ハ卯月にと見へくしるの
ともあるなる周正のころなるさ義こそいつか見来時
をぬりとれはなるくは四月を卯月とし猶決なよりくれ
なしといふ事ともあるへけれと今も猶四月を卯月といふ
事なさしるく八上巳といふもすしるも三之月上旬の巳の日をいふ
事ハ巳しと魏晋より後の上巳の日ハあるくなほ三之日
代りか上巳といふ事ぬもしく八ノ八ナのさきいぬる月は
巳とし卯月といふしといふ事説のことさいふるまへしとも

聟りましてウツギといふ木はその中れはウツホなればウツギ
と名付しよし其花のさかりし卯月なりされはしも
卯花月ともいへるよしサツキといふ事は早苗とる
月なれば早苗月といひしをサツキとはいひしといへる事
説もまたいふ事あるべき舊事紀に見へしは前にいへる
せしことの由をしサナヘといふもサナヘといふことのよしに此月
の名とはなりぬるといひし由もありぬべし水無月といふ
ハ水涸るといへる説もといふ説もありといふ池名
もあまたしきもあるべしやとそといふ月はえやえるか
事あるまじ即被る事なきにしもあらぬ事にやあり
なれはウツキといふ事にてしも文月の義なるべしとも見へ
にはウツキといふ事は八月をも葉月といふ事漢名も見へし
もいふともあるまじき事又終につきて事あれは長月陽月
のことをは漢名をもあまたいひ傳へしなるし其中陽月と

後にカミナヅキといひしハカミノツキといひしことなりと
へハ萬葉集の歌に神岳山とよめるをも讀てカミナヒ
ヤマといふのごとし古語にはノといふを略してナとかりし
事はいくらもあるなり上のことにいふべきをミナ
カミといひ田上のことをタノカミといふべきをタナカミと
いふが如く霜月といふも漢にもあるくいひし事なれど
それハ九月をこそいひけれ我邦にては十月をいへるにて其の
月ハ異なれども其義を見るときハ相同じきハスとはいへども
漢にハ十二月を事終といひしかどもしく果の終りといふなり
古語に年をトシともいひトセともいひ又チトセともいひし
事ありし略せし事のことにて其の年といひしハトシといふ
ことも一といひ略してことなるといふこともあるなれど略
してチトセといへるハストといふのことなるべしはトシ
のひとつひ略せしてあるハストといふハハツといふスといひつといふも

その読も漏さして我出の読に加り事の読あるはハツともハチともいふなれども万葉集に極の字読てハツともいへど俗に極月の字を用ひてハスともいふなるべし　閏月のことは古人ハノチノ月といひけり日本紀に閏読てノチといふ即此今も俗間に無据言あり

閏読てウルフといふ義詳ならず　あるときのことそふは閏の字を用ひて閏と見誤りしより見へたりさては閏をウルフと云ひしハ閏の例にあらざるべし御座し

日

ヒ干支エトヒヨミエトは兄弟や甲を木兄（キノエ）といひ

乙は木弟(キノト)といふことなり其餘皆ニ様に同し
正之とは日読し古語なれ物をうそふるは
読也といひけり暦本をヨヨと云ふといふ義
也子をねといひ丑をうしといふなと十二
肖属の名を呼ひし之又朔をツイタチといふ
是月立し義出の俗に是れ始をタツといふ
立春立穐を春たち秋たちといふことなり

あるに二日はフツカといひ三日はミカといふごと
きハ其日数をかぞへいふなく カといふ義は氣也 定日の儀なりとぞ
望モチノヒといふも望月をモチツキと
いふの略なり 満月の義は望の月の儀なりとぞ 晦日をツコモリと
いふハ月隠(ツキコモル)也 古語にコモルといひしハ隠る義
也 東月晦すとも云ひしとし

時

トキ義不詳 トキ亦詳しくしてツキともいひツカ

ともいふアカトキをアカツキといひて暁時の間成
ツカノマといふのことなるへし
歳時月日といふ事なれは古の時事
害せしものとも歳といふなれ見へし
陰陽二神蛭児成生まれひしより三歳まて
脚立すとも舊事紀に見へしは始年なる
但し此篇ハ寓言に出して日本紀にもし

見へけり此の歌は紀友則紀貫之に亭寿
鳥海大年神を生ましの也大年神の子神
羽山神鳥を生みたる羽山ノ神また若年神
を生としるといふまつへけり春夏秋冬四
の時節トキとなしけれはまたいへる字
むかはといふ事はえたり月日にしるしおにえたれとも
よるやまとその字といひはしいふ義にしたれ

是を閏如也今もしらす詳なる事成ハ
まうくしの日時候トしとといひ時候てトキ
といふもこといひきといふハめし也轉ジふ
てまゐトといひつといふも時候之月成つきと
いふは日ふりつくれ義へと見えけりまた常成
いひくトコをもいひトキともいふをコといひ
きしいふもまた轉候之九日附月日といふは

日或積て月となり月を積て時となり時
を積て歳と成り歳とお嗣て古と成
今と成るこれ則万世の常なるされはか
いふことばことといひつきといひトキといふ
トシといふのことくに相次て相続して於
トコともトキとも此説しもなかへりと一見
辰時より始て一歳乃終時まても萬世の

常に称こともありなれはさらにいふにおよはすいのさ
毎にことを謂ある人さまざまなれと是まてこれ
の義隠もなく見えて侍る計なり

春 ハル

夏 ナツ

秋 アキ

冬 フユ 並に義不詳四時の名古今の時に依

事ハ舊事日本紀にも陰陽の二神
大倭豊秋津洲を生ミ給ふ又名ハ大御虚
空豊秋津根別といふとみえし是秋
津といふ名の始とみえし不審されとこれハ
後世に名はしめられし所なるへし 私記之説
上古の事の徴しとなるへきにもあらはなし
二神共に速秋津彦速秋津姫の神を生ミ

かの陽神建秋日神を生ミかへし事也
見へされしに延喜式の祝詞には速秋津姫
の名を速開都咩とあらはされしはここにも漢
字を借用されし時は總て相同し
五行ハ秋をいふ字を用ゐられしかとも実ハ
春秋の秋にハ似て義により係あきらかにし也
あきらかに正しき書秋の秋にあらすと思ふ

八嶋牟古牟爲の紀ニ日神天熊大人命（アメノクマウシノミコト）
葦原中國の稲穂をおもしろのひ給ひて
天挟田長田ニ殖のひしふ其秋垂穎（タリホ）八（ヤツ）
握（カシ）莫（ナミ）然しし齋部の紀よ見ゆるを述しに海
ふくもあらぬ秋乃事也けるを豫豪
發嶋神の羽山戸神の子ニ若年神
夏高津日神（また夏之賣神とも云ふ）秋比女神久々年神等

あり哉しく舊事紀に見へし多くの字ハ經
写せしなるへし見へたり又舊事紀に思兼
神児表春（ウハハル）命下春（シタハル）命見へたり二柱も
春秋の表の義なりしにやさて其字緒
用ひられしにや不詳此等ハ名義既に
闕如ともに今はさいふ事なと辨すへくも今
もし古語の類例ありなくも其義成

推ればむかしより古語にをハラクといひし
ハ開(ヒラク)之春の名ハれといひしも年開始るれ
我かくし出しし開果れといふのことく
夏暮しては熟之アツを手ツといへるハ略語
よりしを実熟の時をいふなるへし古語ア
アキといひしも又は速秋津姫の速
開都咩としるされし例によりてはにあれ之開

の義まやなるらしむ義不詳又斎部紀
に飽咋之宇斯能神といふ見えたりされは
百穀既に成りて飽満る義もやあら
む滉瀁溟渤をヲキキウともいふ字ヲホキウ
ミともいひ滄海原滄溟をアヲウナバラといふ
浅をヲホウナバラともいへりされはアキツ
ヲキ丸将領にて大の義まそやあへきをさる

は百穀既に成る故なりこゝは味を大（ミキ）也ゆへ
なる也日神葦原中國し豊葦原之
千秋長五百秋長く瑞穂國とのたまひし
と此義ある故しるしをは冷なりこえを
いひとくフユといひしと冷さは温の路せし
めくみを変る冷の時なる故は刻しく　葉は草木の
芽さす時なりハルといふ古語ハラロといひしハ春お
ろをいひし秋とは草木の色うるはしくぬるき季也

アキといふや古語にアキといひしハ言なる義いひしく
といふ説あまたあれど草木の實の見え出る時葉も熟なるといひ
しハ妻といふともにきらくいひしくたるくハ田をも耕すとさ
ハルといふ事なるらし又草木の實しらし更にアキな
といひしも秋といふことなるいつるしきら但し物を
賜くをアキモノといふなとのことしハれとのといひアキ
とれといふハいふにして是ハ草木なれど甚おほく實出ふ
ある義くとましけるまくしる故も開の字體なるくハラリ
とらもホルをもいひけり原をハラといふも開くしたるなり
今も荒家人ハ京都いひなくハルといふ人古へて方言には
あきしハれといふは開の義なる事れ徴とはなし何事し
ホれといひハれをいふのこしれもまし略語なるアハといひ
ナツといふのこしおもとこれ略語にしかまましナとな
こともに長くなるも時ものの何かアといふ語を

もと又ヒユをフユといふにことなれはこれもまたおもしろき説
ありそもいつといふことゝおなしユといふ證をこなたり
これらの事ハ注にゆつり毋及へしされと十つといひつる
といふアツといひヒユといふ類もしといふ事なれはよく
といふ人ありてあきしとみり出ハ事紛しれはとさ
小注しゐるへし

朝アサ
暮クレ

胡アサといふはアサき開く也（日本紀釈に開の字讀てアサといふなり）天開（ヒラ）る明かなるをいふアシタともいふは萬葉集抄ニ古語よりタといふは闇と

いふことはくらしといふ名をつけしもアムシホドなと

心あることし暮クレといふもクレは暗く天昏

く暗きをいふことし夕ユフべといふもユフは夜

といふことしれ將[illegible]くへきほど[illegible]く

晝　ヒル

夜　ヨ

晝ヒルといふは日也ルは[illegible]く日の中

もとる義なるべし夜ヨといひヨルといふ婦

ヨとは今日と昨日と其中間をさして古語
に此事乃前限ある中なるをさしてヨと
いひ又更をヨといひ又當世をサキノヨと云
後世をノチノヨなどといふならひなるよたとへは
行末の間をもいひてヨといふが如くしてヨヒと
いふことなくしてルといふは浮脚の霄ヨヒといふ
はヨとは更にてヒとは間の古語はヒといひ

にし同の義あり日本紀に右同の字を読てイハイと云事此に同し同亦読らくヒてといひアヒといふも義亦此なり 暁アカツキといふも古語にはアカトキといひけりアカとは開(アケ)くトキとは時也天開争ふるを残るといふや 今朝をケサといひ今日をケフといふ今夜をコヨヒといひ今年をコトシといふみな同しケといひコといふも略語なり古ふ此といふことしてケサといふハコノアサにしてケフといふはコノヒにしてケフといひキノフといふといふもとは八日といふ語の略せし也又昨日をきのふといふともはさ古語にみなキソといひしにて去年をコソといひ小同しくして古をコミカリナといふ類のことくコゾといひ

キゾといふは去年としハ昔より過ぬ去りし給ふキノフ
昨日をヒトツイしといひコソの前の年をヒトヽセといふことも
ヒトツといふヨナし夜を去る事の遠きし去りし夜を
いひ又ヨナとヒヨテともいふナと云ひてヒトツ
といふ皆将過ぬるをてヒトツヒといふりは過ぬし給りヒトヒ
といふは将来し又明日をアスといふアは開（アク）スと
いふハキリといふリと同しく過ぬしハ夜も明ん日を
いふてアスの明日をアサテといふ翌アサテ明日てサテと
は去してハ過ぬく明日乃去（サ）りらくの日を指していふなり

古　イニシヘ

今　イマ　イニシヘとは往（イニシ）へとは過行く　去過りし事なる
をいふなし

米しもしといふのことし又昔をムカシといふ如
はえつゝしといふの為としムとしいひとしといふ古
将語之今イて古語ふはウてを毋いふなり
日本紀 イといひウといふ古将語にてハ奥さ
イウともウウともいふのたとしイてといひ
言といふ義はまゝ多は並り不詳 イは発語にて
其月をてといひ如としイてしは月数の時をさし 詞多る下古語
ていひしのや

已上嚴時

東雅巻之二

地輿　　筑後守従五位下源君美撰

地　ツチ義不詳按するに我国古の語に天神国神は天に對しては必ず国といひけり天津柱は国津柱などいふの類悉く皆云ひつる例なるべし其也は旧事紀古事紀等の記に見えし地の字を読むにもクニといひ又ツチトコロなとも読て旧事紀

の始り天地未判なりしをなされし名ハあ
まねくしられしものなり三五暦紀淮南子等
に見へたり諸子を渾括しあまた文ぬ
おそれ地の字を混淆じてと銭虫とよむ
古語味ふしとはよりひてヒメノキといふ
袖ヒチ袖ヒツなどいひまして云
漬ヒタチ虫なともいふこと也
皆虫の漬之
漬ヒタスをいひてヒチキしといふハ乾カハリゐるをヒルと

いふの反須なるへし 乾とこルといふハ日照もれ義て漬さいはくこ干といふハ未乾さハ
ハ白須とハいふなり 又ハ二ともいふなりハ條若沙垣なれ
字須くハ二といふ也 釋名左門く土薑へ
白細密目垣と注しけりハ二といふ義
詳ならす須古須とし二といふとは黏は
首れ義あしきて二といふ須須しして 又と
いひ子といひ人といふ又皆黏なり

此義あるべし説文に據るに埴ハ黏土と
見えたれば陶あしらひも黄土をいふ
ではニしといふは土の黏しめるをいふに似
たり埴をハニといひ脂をヤニといひそれよりの泥塗をと又ねといひ煉るをねるといひ糊をのりといふ皆其
黏着の義にてあるべし また黄壚の字ハニとし讀ミ今
此黄櫨なるべし注に世にハニ色といふ
との即此なるべし黄爐を染るなるべし ハニといひハジ

といふ名なる例にはあらざれハ土師の字ハニシとよむをハジ
とも読むへしハニシいひハジといふ並ハニ乃略語し
又旧事紀日本紀等に見えし天ノ梔(ハジ)弓
といふもあれど古事記に天之波士弓(ハジユミ)とあり
萬葉集にものゝこれもし久ノ木ナシれ出を以好
りあれバ桑の一半様なるを梔といふ也
又し山桑あれまた山桑をハジといひしも
其木の色乃黄なるによりてくすとく

こゝのこゝろハ萬代ハこゝといふなるへし
なき也萬葉になるともハ二三といひハ三と
もいひし也古乃字讀てハ二といふのおなし
と萬葉の名にしるしけれは古乃筆代
はハ二ことハいひしと見て萬葉古今乃讀りかくのしるしにおほし
ていふくもあるこしるし
心ありて萬葉ミや

磐 イハ萬葉集抄ニ古讀よ有とイハ此毎

イハロとヒいふしゆりイハともイへニとヒ
イホとも書るイハロとをヒイハホロニヒに
皆同じ義なしと見えたまへり イハロイハホロ乃ロは並り目なく後皆
これ乃御家の事にも上古の時には菓子様なし
こ宮り居らは神聖お給ふ戸を
道の昔（トて）成麿の制始まりしかはと
神を祭るとイハ井といひ神殿を称戸

ろといひしところのは古語のまゝに取て
ぞ見えたれとも此我か代にし岩窟ぬ居
とあるもしよて伊都之尾羽張逆に天
安河之水を塞上て道を塞て天石室
ト坐とも記れしといふ事あなり舊事紀古事等ぬ記に見ゆ人代
ト成ひてとも賊者なかを窟に居あるをも古
蜘蛛といひ穴しくしと摂津國風土記に

ハ異くりをとは巖磐乃類イハホといへる
イハといふのことば即今家をいひてイヘ
といふのごとくなるとし古語にも家哉
といひしイハともイハロ家ともいへる
又しる岩窟をいひしイホともイホリとも
いふのごとし石室イハホイハホロ家といひし
古宮ぬ将しくイハホといひイハホロといひ

は岩穴或鑿岡なる乃義く古語ふふり. 九
なとゝ宮しハ岡といひし謂なり. 此迄ハ旧む
紀ふと岡乃字を読ミくホルとはいひし. 是
窟の字イハヤと讀む義と同. 石室之邊
石
イ之義不詳. 舊説ニ石或イ之之ふハイ
は發語乃詞也. 之之字ふハ石ハちいさき宮也とも
氷り添ふ井と明し. 必は流也りと存し

こしいふやしいふ無事 洗むしいふこともハ原本にま有里 しいらいさもあるへしいつ
きり水に洗ふする へさつ頃うさ好ま明り されはこそ岩といひ石といひ礒
といふ事の山しれも瀬乃端しもあは出る
實も異なしとも見ゆるをも石の字イハ
しと讀こイソしと讀ま天石屋戸石
上振ハ社なしさつるさましし 即これ之 イハとは イは旧
流のこくよ義瀬乃間を見へはし古瀬小门といひしも四之
礒回浦回なとしいふこれくイハとイふは千根の盤なるを云明り

又古語にしといひしハ下に日本紀に下の字を添てしといひ
ありイシといふも地の下にある乃義にて下は岩根なる
いふことなれ然り況言へハ其堅根なる義ハイハと
いひ又しかいふ物もイシといふ事也

又細石をサヽレシともサヽレイシともいひて礫
の字或用らはサとは細也小也サヽといひ
を小にして小しきなる義也といふ
語略也又は羅石や又万葉集抄に古の
時ハ石をクリといひしハ山陰乃方言也

と見えたり仁徳天皇の御所よりイクリ
といふ事のあるを釈しハクリは石をいふ也
イシは脚注ありしと見へしかハ此語由来
尚稍久しき事也 今も俗に細石をクリイシなどいふ也 古堀城
ハチクレといふも古の石をいへりしなり クリとふ
クレといふハ轉語なり
沙 スナコ 古の語なりスナといひしと見ゆ

なり沙石根をも申せど紛らはしき例
猶又といふとましいことも小されゐるくイサゴと
いふとも石ころゝくいひしなるし
小児の細石を数ふ戯をイシナトリとも
イシナゴトリともいふのおもしれ是なり　倫してナゴとも
マサゴともヒいふ古の俗の物を賞揚し詞
よてといひてナしといひし事多かり　万葉集抄にもマナコ地といふ
りてさいをいふくといひ出りおの
字濱ともてともマナゴもいふ　ナゴサコ叫しといふは甚

一

塵

纖細成いふ詞なるべし

チりとは散也齋說ありチりこチ也は

塵と泥ヒヂリコと成いふといひの說 彩昭 又一說あり

チりとハ草木の擢等するをいふ其の風よ

物のまじりもしるをはヒチといふといふの說 紹覚

ちりハ塵泥塵去何色をもいふ無しチ

りアクタなしいふはチりハ塵アクタ

は芥なりアは泥濘乃事にてクタは
腐くし即腐芥の義や　俗にクタリホコリなといふことは大紀之
義にて大体よし
記れる泥塵をいふへし

泥　ヒチリコ　係石砂にヒチリコまたコヒチ也
いふと見えたりヒチといふはなえりといふ
も語脚くユといひスナコなといふコのこと
はみ同しなく　俗にヒトコといふも義不詳なれ
又トロロソといふことを又滑をいふ也

泥の濁る河成
いひしと見へたり

已上六名

山

ヤマ義不詳万葉集鈔に昔ハ山をいひく子といひしくヤマといふあるヤはこゝろ義也マは高の形いふそもの形ハるゝ高なるをいふ也といふ説アされど古語に八(ヤ)俣(マタ)といひ八(ヤ)田(タ)間(マ)なとゝいひし例によれはヤマとは

なく甚高く満てぬる哉といふに似たり
古語しやといへしよは重り積るをいふ
こといへしよは限てし満りぬるといひし
あり凡物重て積りぬるといは意義に
こゝろ限て満てぬるといひし意同あ
てもそれは縁よ漢字を併せて添の字
を讀ゝむヤといひイヤといひ同乃字讀ゝむ

古よ子といひしハ山嶺
也田代やといひしこと
こしいふにて用ひしといひあるへく
れハこゝさい義く成多てといふ事も多くなる義くし
されと山のこゝろは其形多くはありしといふへし
またも古語よイヤといひしことこれハイ体続語の意なり
といひしも語へより今も俗にイヤか上に言主つまと
いふのことまハ古語の遺なるへし語の字を借てヤとも
イヤともいふなりまたも字義よりてかくしことも
増れしといふ義なりなりしはしらぬ世まて古の時に定
てし積のるをいひてヤといひし義は隠まてたるにあり
ぬハ乃字借りてやといふのもとまハ其義あるとみえたる
れハ古語の義をまとひしこともてれ頼多くなりて先生の
言あるのうち小漢字あまり執ものそのまゝといひしハこゝまし
らの事にもあまりもあるされたるものくして京にあまた見ゆ

もよく我国乃古書を読む人ハ古く武蔵の
所にしつゝ多くの書をし多く言を貴ぶにも拘はらず
山の字読ミくムレとしいひしこしまは百済乃
方言やしと見へて書紀景顕並に読ミて
えるしいふ上古にはるしむといひしに萬
葉集鈔に背も山はるしといひしといふは
おもへ 筑波根富士根かしいふ歌 古語にるしといひしには
止(トテ)まる乃義あるしらは畢竟至る也といふへし

ちを止るよしく勤さるの義なる事又これ
は神おしまつる也とこそ之字といふ事なりとあり
俗世乃俗之訓の仙山伊豆れ仙山なとハ
帰おもく道をも俗よせんやといひしを後
小之く十なるといふ事よハ俗の路の字を用申 古事注に御路
ゆくこそとも とふこれなり 額書は桜なるり山嶺なる山とし可
除る逸志山嶺紙や如之首之有二領一頂やといふ

事也 不字義 此説によりて教示し給ふなれ
山ハ險しく上下川へ走いたりてメウゲといひし峠
の字創造りしも字を作りし即嶺之文
ウケとは多かるや 万葉集 抄よりも由 ウケは穿之なる
山を穿ちぬる道なるをもメウケといふ古字
紀ニ神倭伊波禮毗古命吉野山より
踏穿越テ宇陀に着給ひしといふのことし

こゝに 日本紀に寫誤て ウカチといふ寫道の義に 嶽タケといふタケ日
高(タケ)く像又設には漢語抄を引て嶽の字
にタケと讀むと注せりこゝにいふ義無きにや
の義に同し舊事紀日本紀には挙て
峯の字を用ひてタケと讀むへし嶺
イタゝキといふは人の頂にかなひていひし
を續日本紀にサキと讀て私記には山側

人家山間也と注し倭名鈔には謂くこ
サキといふことゝふとハもしそこ夕々の
この義に同し　崎の字れ下を併見るへし東山の地
名をはサコといふ示さくしこしある之
方言にそこおもひしらはそこらの人は向ふは山の岸坂
みる所をサキといひし藤清輔朝臣の奥義抄に
陸奥武隈の松はふたきにして武隈のをかとて山のさし
出たる所のあるにて近く見る人さへもしらさせり今も
俗に尾崎のさしおろしたるさきを鼻といひまた所の論といふ
しさきハハナサキといふハ岫濱くサキといふすみこそ見ゆる
峡やてノカヒといふも山の間アヒへカヒといひアヒと

いふなり瀧瀧之　万葉集の歌にハカしとよみしを　岫タキ
岫小相の出よあひくといふべし
といひ洞なりといふ事俗名称にはえくより
日本紀には洞の字瀧くタキといふと通せ
られたり上古乃瀧よりタキといひしハ漏^タキ^之
古事記には陽神火神を斬給ひし刀之
手上^タアミ^に集る血手俣より漏^タキイツ^出といふ事を
本として漏瀧々久波とといふ字注しまに

舊事紀にも少彦名命父乃神の指間よ
り漏落しこと見へし此古事の紀に深
よりて久岐断して寄せしこと紀に見えたれハ
隙ありて漏出へき所をヒクキといふ詞
道譲てクグナヅ出といふの出しと見えたり見へあり
し寛濱てウクノチといふ即せし岫も洞も山穴なれ
クといひウといふハ彼濱なり
はクキともいふなるし洞をもホラともいふは

闕(ホル)て日本紀よむ闕の字を讀てホルといふ
ホルといひホラといふ如し坂サカ
といふ日本紀には山險といふ字を讀てヤマサ
カといひしのはサカとは險(サカシキ)なり麓フモト
古讀しはヤマといふ日本紀の注に麓讀
てハヤマといふこれくはしくは端の舊說に
ハヤマとは山乃端をいふなりといふ地字

これ山に入る事の深くしぬの義也ヤマノハみといふは略
くヤマノハは山の末なるとなせり猶さも本末といふ事のおもし
倭名鈔には甘麓濱らくフモトといふモトと
は踏初（フモト）なり山よりのぼり初める義なり初の字
右訓モトいふ本初
の義なるへし

丘 ヲカ義不詳

谷 タニ義不詳上古は丘をはヲといふ如く
谷に對し言ひけり八岐大蛇蔓延二十

八丘八谷之間ニ味耜高彦根神映于二丘
二谷之間ニといひしのおもしろし。これやシカと
いひタニといふハ紀（シキ）し絶（タツ）といふの謂にて
山起立ち山陽縁り義なるへし　シキといひシカとも
將須へタチといひタニと
いふ將須なり　丘陵中ニシといひしを文
徳の字假りくシかも讀つき應需の紀
小見へくし凡丘小谷の字古事紀にも

八谷ハ瀧しと云る也しのこしれこともあり
後人瀧上と云るして又ハへと後也ことさこれハふられ云るも也し又後丘陵岡岳等
の字添へて並ぶよりカといふよりなりて
峯嶺乃字読へてハりしといふ事にもあり
たらと旧和名万葉集等又谷乃字を読てヤツといふ
せしといひウナといふのこしれハ方言也同
しらしぬよられる事や讀るハサてと

以上のことくにハ山夾水曰澗となしと見えし義

谷讀てヤツといふことは播磨国

風土記に見えたりされハ東路山陰

に同しかるへし

の方言なりやおぬれやといふハヤツといひしをもてやの

語よりツの音を約してなまりしなるへしせといふハ大和の国泊瀬を

長谷とかきし旧説にせとハ狭の謂之といへしウナといふ

は信濃国更級郡に在小谷にあり又ウナといふ田畦

のこと低あるよりいへるウ子といへるにハ山谿のこと低あるをと

ウナといひしをやハザマといふは日本紀に蘇我入鹿の家

を谷の宮門といふとしるされしく谷讀てハサマといふと

注せられたり今も陸奥国にハサマといふ池名多かりこれ

此千歳東山の方言なりあるにやなといつとにも南国の方

言同しかりねれるに似たり

谿　倭名抄ニ漢書ニ谷と同しく爾雅水出山入川曰谿の説を引けりさてしかもこそハ谿なり小谷川といふものゝ名なるへし

原

ハラハラとは用や古語はハラといひし日開く事をいひしも日本紀に開の字讀しハラとしはいひしや遼遠をとハルカしかるを開き遠さの義にて今も荒業れ

方言に原をハルといへり古ハ又讃てアラ
といへるをアラとはハラの略語しぬ郡
荒閑や又古語に天之原海原河原など
いへるし類者ハラとは邊(ホトリ)日本紀に川上の
字或カハラと読しつこころ邊之をすゝ
松原椋原栢原などいひし類者ハラと
は林也日本紀に竹林の字をタカハラと

渡して杜林の字を渡りて杜原といひし
並にられなり
野ノ義不詳古語ノしといひしより帥る
乃義なるあり古語拾遺ノ栗の字を栽
しても日域帥その義にといへりノこ
といひノスしといへりノつしもノことしといふ
のふとれをのこスつこみとのことし皆され

將棊く

古時野の字諺く十しといへるは

ナしといひ十しといふは將棊く出し古語にて十

めしといひしは十て莫くて義得るあらかし

は無我人しといひし事ハ甚原遠曠潤の

義ありし似たり 仁とて居めるその名仲し 好色ハ出しまし戯之也耽也

の我戯しして年よかれをヒスといふその義並り同

しかしとて

杜モリ日本紀に見えし長柄杜私記に讀て
もりとあり天武紀世人此字讀てもりといふ事
これらにまた見えたれど此杜の字
のまぎらはし社の字をもて誤寫してそ
あまた讀しか旧事紀に見えし濁淋楓木カツラキ
古事紀には濁淋香木カツラキとあり日本紀
には濁淋杜木カツラキと見えて此にカツラと

いふは注せし猶誤也私記には杜字を
住の字を誤れりしといふ説也長柄杜乃
名とこそいとなりし初より杜の字にて作り
由には私記にはましこれも是誤なとゝし
例せし趣なりともあれ説もみえて讀
てもとりゆへあらしつゝは必もこれ謬人の迷
誤なりしを私記の比注ぬましくハ社の字を

し事疑なくしかして萬葉集にハ社なる神
社の字を書てもりといへり又古今にハ
此國にしあるも社なくし樹を植てまつると
なされは是をもりともいひしにもイツキとも
いひし也日本紀に石上振の神榴と見え
生(イク)國(クニ)魂(タマノ)社樹(モリノキ)なと見えなくまし集別主の
舎人等の請れ國にイツキしるへしと紀

り悉くし釋せしつこしろぞあらむとくまし此度

ようしく神社にしとあるねし此れ本多

志賀武訓ぞとモりなんと心しも後人遂

り本多恵くととふ義とあらし惑の字

借用乞モりし讃む事ふとなりしくかく

はゆみかしい附との代あと多くの事之古

諸り神社をモりしても伊ゆきしても心し

此義乃こと義は既に聞ぬと見えしかと
宗像嶋神新羅の曾尸茂梨の事にやと
思ひしかと見へしまゝ神籬の字讀て
ヒモロキといふを又ヒモリといひヒモロといふ並
りしるし古は神を斎祀(イハヒマツル)る所のさしいふし
取もてまく様に見えハヤこれといへるは同し
よ事なり因みえたるを
キリといふもの、事ハ像名
鈔に言に字日本紀

よえらし而よ世の人ありく用ひとまり始めしたてり
附し出

林ハヤシ義不詳於雲出風土記よ意宇郡
拝志ハヤシ郷の事を記して昔出造りれし大
神大元ね命越コシの八口ヤツクチを平ぼさむに此地
樹林茂盛しぬ小爾りつ仰して吉御つし
詔良志とのたまひし在りさ林とうふ神亀
三年の詔よ依つて拝志とあらためた

こは上古乃時成立せしものハやしといひし
語の間に始てましし顕宗天皇記に見えし
室寿（ムロホキ）の詞に築立る柱者此家長御心之
鎮也取挙（ニ）棟梁（ヲ）者此家長御心之林也といふ
事見えたりし舊の古事日本紀等に書
に上世の事を志るせしに見えし林の字
皆語にハやしといふ　京の語り　是をうゝ語てハやしといふ

神ハ此天皇紀をはしめとして後まて皇極天
皇紀まて蘇我入鹿臣まての林臣としるし
えへしと林臣らしくハやしといひ、又万葉
集の歌より蹤(フ)麻(ニ)形(カタ)し林始しと見えしを
抄よりハ松山なしれいらくに見えしやし初る
へ於目人出来りいひて始り凡物を生し
古代ハヤス分と云是くさみれ林をハやすし

いはひし志呂加神社をすゑぬへあしなみに
樹木生しげらぬ森ぞいはしをすませ
よりて其竹樹の数生しげりぬる所を
ふゆひてはやしといふ事によりてあしらむ
見えたりとあらむ
然はあれども上古の時古志国や古事記
によるに宗像高志神の時八岐大蛇を退治し
地八口は延喜式によるに大原郡に八口神社あり風土記に
矢口神社と見へしあれば古志の地を割て郡
縣を置れしに及びて大原郡に録せしなりけれ古志
国の名は早くより神門郡の郷名に遺れり出雲風土記

の外諸國諸神の名にハヤシといふそれ多かり式に伴志と
也称志とも伴師ともあらして林字用ひし甲斐國
中宮寺みた之川ありしかれとも式にハヤシといふ地あるに
至林神社波夜志神社都為神社なと見えしかしここに
多し忌部實神社のみならせしもうらかくれしの説これを
係のみなりし古の時にはハヤシといひしもそれハもりなとふ
そのことく神社ある所に蔭木ある地をはやしといひしとみへ
かり信濃國にしてラカといひハヤシといふハ即神林と書る
事にハあらしと彼國人の説には家國の古語と見えしといふ
もあるく以為記官部為徴とせし事あらはこれ又一附の證と遠
すし蔭木ある山にあるをいつこといふ義なるへし詳
熊谷より記古語拾遺篇なり年置帆類神其

杣斧をして大峡(オホアヒ)少峡(コアヒ)之材を伐りける
瑞殿(ミツノミアラカ)を造くしゝと見へしは此事済り
杣木伐りしく事様ハ今にも同じなれハ
後よりつたへしハ上古ハ大峡少峡なれと
以前ハ同しうへて杣の字落くりしと
いふ事ハ弘仁年中修理并師山田福
君等撰せし所の功程式に見へしを

呂覧稿君が創造せる字也し江談抄に
彼見えしよし也

藪

ヤフ義未詳倭名抄藪讀てヤフと
いへり呂氏春秋乃澤有水曰藪の説あれど
よりて萬葉集能登歌にヤフといふ事
のあるを假名抄にハヤフといひ水澤といへく
かりし薫爾ありしより生ぜる事ありと見ゆ

これは世田舎のことはしやハうとヒいふ
しるえより皇極天皇記民間の謡に
コノヤフハラしるかるを釈よりて鳴之
ヤフハラは薮原之しえへたる皇かうはやハう
といふは即薮原之此謡国史書事入
久しまくて今も俗よヤハうとヒやナるも
いふ是此くましく傳不抄よ蔵中虫大荊の

郷を讀てウホヤフといふ也見えたり蓋し
ハ又荊棘叢生れ地をヤブといひしなる
へし今も俗に竹叢を呼てタカヤフ
なといひて藪の字を借用るとも據なし
也といふへからし

澤

サハ義不詳私記に多礼字讀てサハと
し古者謂衆多為佐波と見えたり

澤　味ぬくサハしいふしはゝ古葉本莫敷也
衣のゐ乃の義よりてかくいひしもある
へりしれ
牧　てキてキしはてはてはつるやキは到へつる故
至くれ義へ條名花抄よりは牧の字ムてキ
とし證ぬるを
田夕義不詳古語より牢ふ夕といふの證て

タコラしといふも手よりていふ詞也（今も掌をテノヒラ）
知とふ田をタといふも手の作る事なれは
ましくなれしかし此ひし作る文字ふ
田地をこロくといふ日本紀ニ田地の字を讀
てこロくといひし即此や後の俗まし代の
字義に用ひ讀む事田地の字なとく
又田地量るやふも代をとて日本紀

小須の字讀をし江口といひしに此をたて
それ江口といふ義乃ことく記ハ已下闕きぬ
詳なる事ハ別に記せし
地あらましは注せさる町ちやうといふはてとは
間之字はなく田間乃道路をいふ文字
市上乃巷陌のこと義を町といひしとそ
間道の義之居町宗女町又ハ市人町なといひし
彭これ之條名抄居家之類に八坊の
字讀てちやう
といふなり田十段を一町といひしこと見え

此字もと田區をいへるより田區の字讀
てマチといふも亦此義にて然るなり
畷ナハテ倭名抄ニ田園字苑云
田間道也漢語抄讀てナハテといふと
見えざるをナハテといふ義不詳俗間より
縄手なるとおもひて地を界（ケカ）ふにも田をとるに
も縄河とさへ手は上古よりの俗にてと

八 万葉集抄よりウナテといふ事載ウナは
海のテハハタの義ヘ邉をいふなりさて
はナハテとは田乃畔ニ縄引ていふなり
よりの道なる義にもしく畔クロ傳説
ニは田界やクロといふ一訓にアセといふと
見えたれと上古にはアといひしも素戔
嗚神日神乃御田(タ)の畔(ア)を毀ちしと蘇る

紀にも見えしなり其紀にいふ営田の阿哉
離つしといふし古語拾遺にも毀畔溝く
アハナチといへるのしも或ハ方言の同し
からぬもやはし古今乃云の異なるやあ
らむ其義ハともに詳ならは
或人の言に星巻草野とも言義をわける事深けれハ古今
於今のこゝろに言あくりれ況や古き古樸随に随りかし
猶云はおそれの其義深く求めへうに畔をアといふ詞
或ハ古語にはアをアといひ是はアといひしなれは田をアと

いふなりしかして畔をアゼといふ事は足立須の義なるべし
アタをアゼといひしは川瀬のせきに水みつるつゝみ所なるに
これは俗にもアゼ給ふともいひて又クロともいふはいかにぞや
畔田地をシロといふ事あるは後に代の字借りてシロと
訓む田代苗代などいふ則是も田地をシロといふよりてそ
畔をクロといふ事亦是白黒のクロの義なるべし民間の
童謡にシロタクロタなどいふもしるべき是也これは
滑稽の云ひ似たるものにて俗言なりそれ義を考へて求むる
にいたりていひしは渇も及ばずやうなり日本紀に級の字[illegible]
てアセと訓む事あり今も俗に孔地の突といひてアセ
といふ事あり畔をアセといふはそれと其の田の間の文
給ふる義にして思ふにもあるにや
畝ウネといふ義も未詳古語にて国名にして

フといふウしといひこしハありフといふウと
いふは素々縷乃緒せしく私記ニ霖因紙
アハフしく濕み是因をてメフしく濕ひ方紫桑
掛てニ麻の生ぬる所裁ウしといふ等島をウ
といふはつ𦾔乃事く也見えたりけしハ古
の時ニ霖是ニ麻苧と因フいふもウと毎いふ
しく畝裁ウ子としいふかたにしまもウしといふを

田く子といひしを垣根子しいふなるへし
又之百六十歩を一畝とし畝の字を読てせと
いふのしろは其義不詳なり倭名鈔に
畝読てソメとしいひ田中渠之と注り
舊事紀日本紀等に素戔嗚神日神の
御田の渠須をあれしといふ事を廢渠埋溝
の字を志るせり四字引合せしてソウメ

え潰しくこりえは水の溜滞之滞ニ河

渠なとゝいふ事ニ相通の川へ義も見ゆニりえ

りえは此訓しるす又漢の字日本紀に

濱をウホラといふ其義不詳 ウナは字ナ八能字を

ふナの義取の道ニ
作る義ニてや有也

暯

ハタケ義不詳日本紀ニ暯の字讀てハタ

ユといひ耕麦之囲と注せられたり海

若狭にも日本紀私記を引てハタケと讀し別に畠乃字を出して續捜神記の江南ハ畠種麦といふ事を引く畠一曰陸田ハタケと讀しより陸田とも和田ヲ翻し以て畠とす（?）ものとし畠の字を訓故し書るすは思ふに此字ハ古乃俗字なるへしハタエといひハタケといふユとケとは音通ふ轉変ありさて倭名抄ノ火田乃字を

おし漢語抄を引てヤイハタと讀こ而し
畭の字をもヤイハタと讀て唐韻に火田
也不耕而火種なりといふ説を引れたり
ヤイハタといふは火種の田の義にてヤイと
は焼くハタとは治田之古は時すて田を治る
事をいふといへるは開く墾開の
延喜式に治治國史僞稱小墾治田神社治
義や　田をも治てハタといふ又迄に墾田無小治田

の郷あり條若禄ニ讀てハタといふ又田史ニ小治田ニ小墾
田ノ字并ニ讀てハリタといひてまた留ノ字讀てアラ
キハル也といふなり
皆此義明り　また俗ノ畑の字を用ひてハタ
ト讀む也字又田ノ字を下にして栽陸の俗ノ田
なりし創造せる所なるし

圃

ソノ義不詳苑囿ノ字讀むと示園
と條若禄ニ園ノ字又ソノ也といふと
注し季宗ソノラをソノといふはソノと云はり
ソノの字を細かく叶ひしし由始まりソノ

ソトは古語曽都毛の義にて今俗にも背戸の畠なといふ是也
又しも古語に背をソトといふ万葉集の歌背面の字を填て万と
といふこともあれはこれにてもさせといふは背語也ソノフといふを
ソは則背也程言詳也ノは詞助也フは畢竟汰アハフいひ
是田とつゝめフといふならんとおもはるれ屋後田圃の
謂にてもあるをとへていひしも同じ意にて皆古語也ソヒラ
といひしト、ヒラと
いひしハ側(カタハラ)の謂也

已上田園

水

水といふ義不詳万葉集抄に水をミといふも
いふも常乃事也といふ水とはといへる

ミツを吹にはことふしとしつの音を細かに吹しくなれ
られ新後先ころよ御姉へし古経よこりしくいひしことを
に水をいひ揚しいふかはらさこをくとれ中古経よこりて
いひしは後よりけうこといひしことく満干ぬることを千
しをいひしは穀蔬菓木の實のしくりぬるをいひしふされ
皇世何こといひけしいひしことしもちくなりたれ秘
いるらくことくいひつといひしいをも乃義まやありむ年義
をふり考

波

十こ揚水也亦鴻ぬく古経よ十こいひし
小舉揚の義あるをとし稽ふ紀旧本
紀ふ舉れ字波くく十しいふけり名鳴ると

叫ひ鳴くやいぬるを挙るの義也鳴ねし
浪の音あるよりよれるなるへし又ハ阿波
国風土記に奈汰(ナダ)と云者を浦波の音を
止時依る奈汰と云しいふ義なるへし 地名小 鳴海鳴
渚なといふこれ古語にナミしといひナダしといふ事なれとし
ナミしといひナダしといふ年のはてしナミしといひしハ鳴海
しかも語れしくナダといひしハ鳴渚しといふ語に同しナと
いひトといふハ並に鳴るか里浪語とも亦同し
氷ヒヒほヒイや舊事紀日本紀等に見えたし

出雲國簸の河古事紀にも肥河(ヒノカハ)とあれば
記しをも國風土紀にも斐伊川(ヒイカハ)とあれ
がられなるべしヒイとは冷やヒといひヒイ
しいゑヒユといふも皆將消く萬葉集鈔
に氷をヒとしいふをヒユといふ詞なりといふ婦
即此やまのコホリといふは凝(コル)なるべし
泉イツミ出水(イツミ)なり飛泉をタキといふもタキツ

くタキしといふきの名にいれるを泊そ惜しく
舊事紀日本紀に見へし湍津姫（タキツヒメ）命古事
記に多紀理比賣命とあらはせしこともあ
る也めりタキリとも見ゆもとより立ちへ万
葉集抄よりみえにメキミリフシミリといへり
御座しし古く流るゝ事なとあるをいふ
立水しは瀧、古、母ゆの新、あくといひあり

タキといひタハしるとも将須ましいとハ万葉集抄に
いふも水くしといふ即世く詞曲よれあるへし
延喜式
の祝詞にも中臣の祓乃詞に高山
の末短山の末より佐久名谷に落激
速川の瀬なといふ事もあるふタキツと
いふは即激（タキル）の訓にて沸泉の義なるへし
古く湍の字讀てタキとせしは亦湍の
義なるへし後に湍の字をは讀てセと

いひ瀬れ字讀して多きしといふ條也抄り
は唐韻南人名湍曰瀬の流を川閑え
なり温泉湯をユといふハ古泉乃温なし
て湯のことなりそれをいひしく日本紀
温の一書ニ泉れ字讀をヨミといふ
も即黄泉泉ハ黄泉は地下をさしいふ
和名ヨミといふしハヤミずといふれ尋く

ヤミチといふは冥途也或抄に上古風俗
ヨモツといひしは即梵語の閻魔なるべし
せり是又天をとソラといふは呂須羅といふ
事なるべし

沼
又て義不詳古語にはヌしといへるし
万葉集抄にヌマとは水の流ぬをいふ
といへり此字を遣しし古事記に長又淋命

しく美毘古の痛矢串を負ひ給ひき御手
の血を洗ひ給ひし所に其海を血沼（チヌテ）海と
いふよし見えたれは今の和泉国の南海へ
さしは古より又しいひしものゝ後よりいふ所は
ほ聞しつしぬるに倭名抄に瀦の字を書く
又てゝもいふは後に又つといひしなれは水
たまりぬる所の流砂の上なるに溜まりて其

水浅き所と見えたり今も俗にこれ
らの所を小沼といふ無心(俗に泥澤の地をかりこなしといふも)
(沼の名相近くて沼)
(滑なることしくあるなり)

池

イケ義不詳倭名抄に玉篇を引て畜
水也と注せり籞イケスといふ事は倭名
抄に唐韻を引て池水中編竹籬養魚
也と注せり今俗竹を編むかりて貫と

いふあ字池よりはる竹籬なれしイケスとし
いふなるべし

塘

いふハ源名抄に纂要を引て築土遏水
曰塘又説文を引て隄也と見えたり又禮記を引て畜水
曰陂隄者俗作堤なり不證ていふといふ字見え
たりいふこれ相言畢土なを樋し渭にし
て即築土高ずるの義也 今俗に堤をドテといふハ土堤の字なりといふべし

壚埭井セキといふは倭名抄に唐韻云
訓て壚埭は以土遏水也と注せり井と
は止て集てセキとしは塞て水を堰せ集
て塞くの謂也

井

井は万葉集抄に井とはあつまりといふ詞
なりといふ地を鑿て水を集むる
の義なるへし日本紀に好井乃字を読て之

こゝろといふこゝろは人のこゝろといひ人といふは
此流にいふは世に万葉集抄に井を
いといふいつは水なといひしこれ之井水を
清好るを好とする事なれとも好井の字
を借用ひられしく後ハ清水の字を續
くこといつしかよりまた又此義もみえたり
河かハ義不詳川の字借也余聞し余

瀆をカウシといふ事ハ百済の方言に残也
の瀆ハ川流をナカレといふも彼国の
方言によりしものなるへし
且今も朝鮮の方言に
川を呼ひてガイといふ也
川の名をナカラといふ事によりて長柄の
字を用ゐる也又是長川(ナカレ)の義と見えたり
百済ふラといひしハ源の義あれとも源の字瀆をフカとも
フツともいふ也今のカワといふ皆瀆脚して其義前りとも
淵瀆にてフチといふも源泉の義明白に似たり

又しては深くいはゞ水くつりゆ轉してつ十と
いふ也古をいひてハしもハ千しもいふのこと
し係を称す流文を引く瀬ト云泉流に
砂上也と注せり又万葉集抄に瀬とは
淺くしてせゞらきの浪の川をいふなとも見へ
るゐなきらはせといひしハ塞の義にて水の
砂石にさへ塞られて急也流るゝをいへは

一瀬(ヒトセ)とも二瀬三瀬七瀬八瀬八十瀬なとも云也　古語に七とし云ひしハ塞と義あり左れハ塞のマ字語てせきとも七々とも云なりそのキ　クあとい云也の中略　かいふる訛日也　湍の字語てセ也と云ひしハ七字みきの本義也

條名抄ニ文選江賦を引て瀲を語てヨトミといふ俗に淀の字を用ひてヨドといふ瀲と淀とは古字通用如渊而淺處也と注し　條名抄に唐韻を引て湍池端反一音專語てせといふとみえたり

ふり澱の字と𛀙西域傳其水停居といふ
渟の字と𛀙音同しといふ事あり 水經注 古書ほしは
水止日渟といへるのや今も俗にヨドムといへ
るは此字也渟滞なとといへり萬葉集
はヨトとは澱をしも浪をもよみて
とらるは清をいへりしと見へ候半

江 工義不詳或曰江ハ工といふは河に

とのミ海にとのミ。ちる深く入たる所を
いふ入江細江なといふ即此や漢に江といふ
とのには聞しうつらん　天智紀に高麗亡極り須
沸といふ事をしるされ須
の字誤てユといふなるへきなれは須江も須賀もユといふは後
方言にて江といふ所もさるは此行て江をユといふ事も海方言に
出しとさつへきか

湖

ミツウミ水海也古時湖字をハアフミノミといひ
ひとり万葉集歌にアハウミしほミホウミに

あはうみの海なるをいふなりと見えし由也

と海といへるは水大にして海のごとく

なるが故に近江をチカツアフミといひ遠江

國はトヲツアフミといひしに對し遠江也けり

ちかき遠きをいひしは京畿をさるゝ

よるなりといふや　遠江國の湖は後土御門院の明應八年九月水也洛外のたかよ湖の水流決して外

洞也淺地に成たり居しを今切といふは其決せし一流

又ハ後柏原院永正七年八月の事なりといふなり

又古ニハ湖の字讀ミニナトヽもいふ阿波

国風土記乃中湖讀て中乃水門といふ此に

海

ウミ太古乃時にアマといひし即海に天と

ともにしてアメといひしか後に古語にてアマ

ともいへは其代にもアマといひし故天と海

と相混せし筆とも多かり紀（古語にアマといひし天と海とお混せし）

といふはたとへハ垂仁天皇紀に帰来りしといふ新羅王の子と

いふ者の名を古事記には天之日矛とし日本紀には天日槍

と見えたり姓氏録には天日桙と見えて無志呂とせし不審甚し
かくいへるも天の字落たるにてしかれは皆同し古語拾遺に
も海檜槍と志るしたり延書にしるしし小鷹流を稱して
葵としるし不知も志るしせし不少漏るへしとは此書の
おもえは東國の古書を讀む人の　かみしといふもしそ
所謂讀む書ならましや
将しアてといひ又ワリるといふしこれは
古の方言同しからぬよりなしたるやウミ
といへは大水（ウミ）にて古語に大ひウといひけり
舊事紀日本紀等にも大人の字讀て

ウミといふも万葉集に大虚の字ウカと
読むこれ即此のワタ也義は不詳
海をワタといふは韓地の方言といへり日本紀に海
をホタイといふも百済の方語也今も朝鮮の俗ハタと
いふ也並ふことしワタの轉語也秦姓をハタと
いふも此義なりと海陸接なといふはおもし　ワタツ
といふはワタツウミとの二語をあはす
ミといふはツは詞助也　ワタノハラといふは海を海上と云なるべし　也
シキウミラキウウミなしといふしは大海(オホウミ)

く日本紀ニ溟渤の字を読てヲキウミとし
なしを僻案抄にも讀てヲホキウミと
いふまた日本紀釈に瀛渤の讀にヲキツ
といふ也もヲキツウミといひしハ瀛海
くそのいとしいひし也も海に読脚の潮を
し古説にはミホといひし続僻案抄には
潮字讀てウミホといひりミホといひし

義未詳うしほといふは海潮之古事記
には海潮とかけり又食潮ともしほ
しほへしこ名はこゝろいひしなり然るを
潮といひ夕を汐といへ帰し見へされとア
サシホといふは潮にしてユフシホといふは汐
にくしふある俗言也 或説に霜をしほといひ潮
をしほといふ並にこれしか
しいふ汐の称をしほにとられたりしをいふしといへるされ
し古語にしほといひし 潮には白きをといふる霜をしもと

いひ潮ともいふハしほのしらさハ其の色にたとへしとも見ゆれ
海濱の鹹ハ霜のことくしろくにて色乃白きもの
潮を煮して作り塩とせる色の白きものなれハにこれ
といふことにいふならんさりところ物語なる八白縄なり

洲

洲ハ古語にてしといひしハ久しき物語なり
水中可居(スム)の所なりとハ久しきにいふ其物語
してこそしといふを八洲(ヤシマ)知之といふ事也八
洲知らしともいふならんしかし万葉抄釈
せし識りし経を讃記せしに洲字譜て

こてしなひしを古事記ニは亀の字をあてゝあ
あらはし事と古の時ニは沙をよひく
スこひりスニノ千子の神沙土根（スニチ子）としるし
これしかこれ此義に從ひ沙洲の義ニ
まうて洲の字をはもとの字の古の字人之讀
洲字の古書ニは
みス之讀しく こてしいふ字は亀の字を用
ハ沙をはなしいス十コなし〳〵讀しゝ古之由歟

物しる渚の字を汀と讀りくこつしせるるは海と
日本紀り鳥濱ろアサキしいひしハ百濟の
方言にしも能く通えしる由をとなひてせ
ることいとしハ即是今の朝鮮の俗尚然
なひてセムといふこ古の遺言ろ古の時渚の字を讀ら
せきしとせしを後に渚の字にもうてセしとも亦セキとも
瀧乃字をとも亦らも皆此例の字讀にてえ可とも
のこそ世ふ傳てれとそれ古今の訓同しうさねいふと
あり字のうちに古語の義隠とましすくあらそ

岸とハ磯石砂なとの辺也崖涯涯謂而高曰岸
しほくしみちり涯をいふ也きハしといふ事もあれ
にしるめ岸ハたかるへきと云也渚汀ナ
キサとも云ふハ波の浪かゝれる礒の
紀よし波激の字用ゐれしかも海礒の
紀よし波浪の字を用ひたり毎ことに古語に
きしといへる浪の義ありしゆへ汀ナキハ

ともキしともナキサともいひしと見えたり

岸をキしといひ際をキハといひしよりいひ涯を
キハといふの義皆際の義あることナキハといふこ
は水べナはといふこともしれ此也水の際はなるをいふ
涯岸濱並に水際をいひしみなりといふことも此同じかる
ぬべきをのくわかしらのあとりや涯をこナキハといへりしハ
浦回磯回なとしいふ事のこゝく水涯の景ろ色をいひ岸
をきしといひしハ細石をサゝレといひしこしといふことし
かくく石岸の崕しき白いをいひ渚をナキサといひしハ
岩磯といひしイしといふなることしく沙汰渚の辛なる
白いをいひしも云へるは百済りけなかしといひしとも
をサといひしと並
涯迄まてありしなり

瀬

ハ万葉集抄にしてしらはハしといふハ白髪

しらせてといふはすれるゝ詞也と見えたる

ありされしハてしらは欐讀くハやてしいふ

しつしつくにその海乃潟のあいたハアてと

はいふしるすへし　古注にアてしいひしハ海くハアてをいふ　てしいひしハふしふしふアといふ

古の網也ゐる　心なり　舊事紀日本紀等に河の字を

瀬くハてしいひなし清濁の字を讀てこそサキ

といふしるを古事紀のしも濱の字濱てハ一
字にひさきとは渉なる字を用ひしなり
倭名抄濱乃字を讀む事古事紀に同じ
又しく汀の字をは唐韻に水際平地也
といふ説をもて讀みにさきしといふ也
後まてしはし汀の字をもはさきハしと讀む磯
れ字を讀む事なにかくし岬の字を讀むか、

おもし岬も山間をいふときこゆれは礒も
水際をいふなるへし汀濱てきハしといふも
唐韻水際の義にちかきなるへし　みきハまて　古今の例
同しく　以事あり　すなはち海濱の地潮去りしあとの沙
鹵をヒカタともいふヒカタを毎ひてホヒカタ
かくもいふは雅事よ小方之義也といふへし
藻塩草　さしは潮洄しちしいふ儀よそへける

こは倭名抄なし師説をもて深き字読
てカタしいへる也

浦

ウラ義不詳倭名抄に四声字苑を
引く浦大川旁曲渚船隠風所也ト注
せり
古語にウラといひし中多し浦をよひてウラと
いひしいつれの義にやあらむウヘウラなどいひし
ハ表裏しをるシモテウラともいひしもよく同し又万葉
集抄にはウラとは下やウラモますしかといふことをきは
なしウラことといふウラムといひウラモことふれね皆さ
れの乃内よりおもふよいへはウラとは下にいふをもて書

といふ義に冥する字又占卜をウラといふウラナヒといふ
これはウラアハスなりといふに同しくして亀甲れうちれ
方位灑(キ)りくはカ火にてやきて表れるの拆(カケ)し形をこ
以事するしれとも又表といふ義は是の字まの上とも
ウラといふウラウラシともいひうらのウレともいふはさしウレ
といふはウラヽといふ語の轉せしなるへし末をもウラといふ
草ふウラウカミしといひ又ふウラカレといふこれこれにて
又こゝにしも桑樹をウラクハノキといひ訓して久しくきりまし
麗しといふ事をウラクハシといひまた和らかなる事な
ウラといふ書の日れ和らかなるをウラヽなりといふなるへし
さて舊説はすへてきねそふことしよは上のことしれ知
なよるのといふたくはハラハラといふ海也さをハラヽといふ此
キラキラといふへきをキラヽといふことこれしといひ
有りゆしはウラヽといふ類もウラウラといふへく有之

これらのことは中浦といひてくウラといへるは倭名抄に
船隠風ふせくとみえし説よろしく風流の事ならぬに和ら
ぐる事をなしといひしことといへる河へなり

已上河海

ここに於て共の如き各文百十をウラウラしいふウラウラといふ
これはウラウラといふ事といふ如何にも是は意味有りけるにや
方便便ことくいかにもさやうにて表現するの様にし様なきに
はずものはしられもし人名といふ変ずるを現して[illegible]ども
ウラといふウラウラしともいひかひこれはいふものにてウラし
こといふウラウラといふ所の様をしるべきものとウラウラといふ
草ふウラウラこといひしきふウラウラしといふことをかはれて
又てにし楽術をウラウリいすことなし[illegible]
徳しとといふものウラいがしとひもし和らぐ[illegible]
ウラしといふ如何[illegible]
もし首流まていてそれをふしては上の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ましふ天に天の[illegible]文百十[illegible]ウウしいふウ[illegible]
しれハウケしハ天の[illegible]いふ同しとそ[illegible]中[illegible]
方位[illegible]しくハ[illegible]大[illegible]やにて表[illegible]の[illegible]
[illegible]まへみしられと又[illegible]いふ[illegible]
ウウしいふウウウしも[illegible]
しいふウウしいふ[illegible]の[illegible]
革ふウウカいしいひ[illegible]
又てにし[illegible]
是しといふ[illegible]
ウしいふ[illegible]の[illegible]
とし[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002